0-1

高配当・連続増配株投資で実現する中長期の資産形成

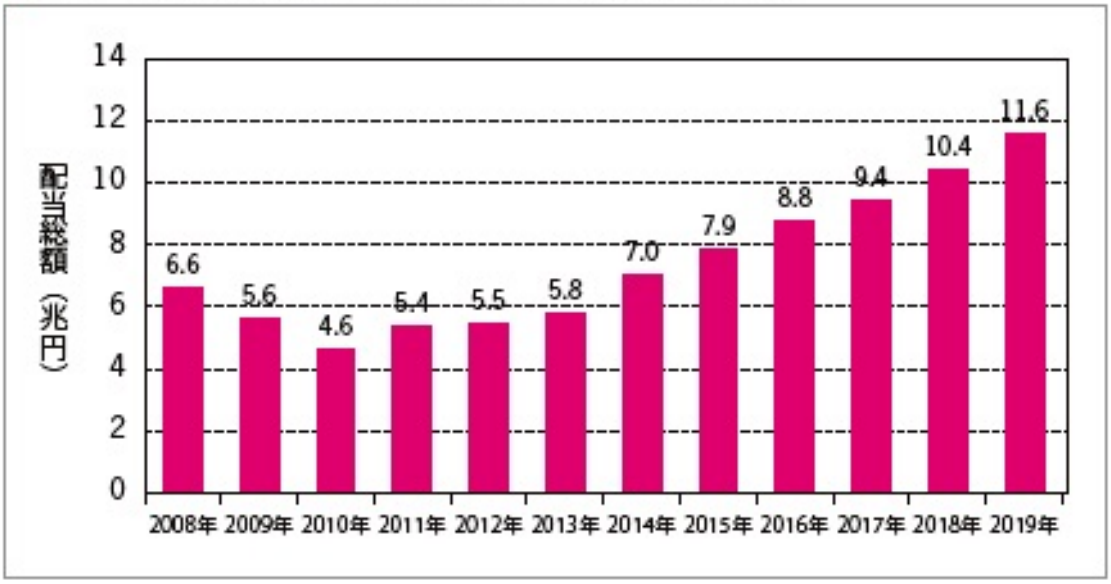
今の世の中、資産を自分で運用して増やしていくことが必要になっています。運用の方法はいろいろと考えられますが、その中でも有力な方法として、**高配当の株や配当が連続して増えていく株に投資する方法**が挙げられます。本書の本題に入る前に、高配当・連続増配株投資の基本的な考え方を紹介しましょう。

配当を増やす企業が増えている

「株式投資」と聞くと、どういった方法を想像されるでしょうか？　多くの方は、「株価が上がったら売って利益を得る」ことだと思います。

それも確かに株の一面ですが、それだけではありません。株式会社の本来の形は、投資家から集めた資金で事業を行い、その利益を投資家に分配することです。この「分配される利益」が配当です。つまり、「配当を得る」ということも、株式投資の重要な一面です。

●図0.1　企業の配当総額は増え続けている（各年3月期決算企業）



日本の企業は、かつては利益に関係なく毎年一定の配当を出す傾向がありました。しかし、外国人投資家が日本株に投資することが増え、彼らが利益還元を主張するようになったことなどから、日本企業も配当を増やしてきました。

時事通信社の調査によると、2019年３月期決算企業の配当総額は11兆6,700億円になり、６年連続で過去最高を更新しています（図0.1）。

また、企業はたとえ業績不振で減益になったとしても、減配して株が売られることを嫌い、**なるべく配当を下げずに維持する傾向**が続いています。

配当と値上がりのダブルで利益が得られる

企業が成長し、売上や利益が伸びていけばそれにつれて配当が増え、株価も上昇していきます。順調に成長している企業なら、毎年のように配当が増えていき、株価もどんどん上がっていくことでしょう。

そのような株に投資して長期的に保有し、高配当を得ながら株価が大きく上がるのを待つのが、高配当・連続増配株投資の基本です。株式投資の醍醐味を存分に味わうことができ、また資産を大きく増やすことができるのがメリットです。

株価が下がった時期は買いのチャンス

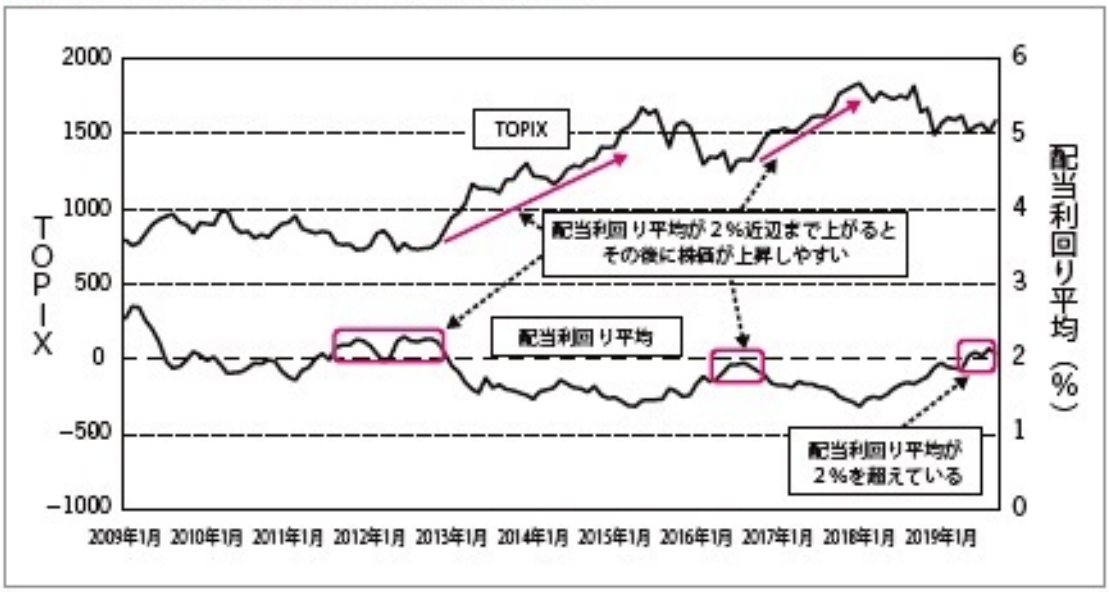
前述のように企業は配当を増やしていますが、一方では米中貿易戦争などの影響で、業績にやや陰りが見えてもいます。そのため、本書執筆時点では、日本の株式市場は踊り場のような状況です。

東証一部全体の値動きを示すTOPIX（東証株価指数）で見てみると、2018年１月に高値で1911.07をつけましたが、本書執筆時点では1,600台前後になっています。2018年12月には、安値で1415.55まで下がったこともありました。

ただ、株価が下がると、その分だけ株はお買い得にもなります。同じ配当を得るのに、より少ない投資金額で済むようになります。

株価に対する配当の割合のことを、「**配当利回り**」と呼びます。東証一部の配当利回りを平均すると、本書執筆時点では２％を超えています。

●図0.2　TOPIXと東証一部配当利回り平均の比較



●表0.1　今期予想配当利回りが高い銘柄の例（2019年11月29日時点）

銘柄（証券コード）	株価（円）	予想配当（円）	配当利回り（%）
JT(2914)	2,494.5	154.0	6.17
インターワークス(6032)	521	30.0	5.76
ソフトバンク(9434)	1,486	85.0	5.72
FPG(7148)	1,090	60.1	5.51
KHC(1451)	781	44.0	5.63
あおぞら銀行(8304)	2,788	156.0	5.60
出光興産(5019)	2,988	160.0	5.35
THEグローバル社(3271)	473	25.0	5.29
藤商事(6257)	974	50.0	5.13
ディア・ライフ(3245)	553	28.0	5.06

過去10年のデータで、TOPIXと配当利回りの平均を比較してみると、配当利回りが２％近辺まで上がると、その後に株価が上昇しやすい傾向が見えます（図0.2）。

本書執筆時点でも、配当利回り平均が２％近辺にあることから、今後は株価上昇の可能性があると考えられます。また、個別銘柄でみても、JTのような配当利回りが６％を超える優良高配当株もありますし、あまり知名度のない銘柄の中にも、そういった株はあります（表0.1）。

まさに、高配当・連続増配株投資に適した状況になっているといえます。

0-2

連続増配株に長期投資すると資産はここまで増える

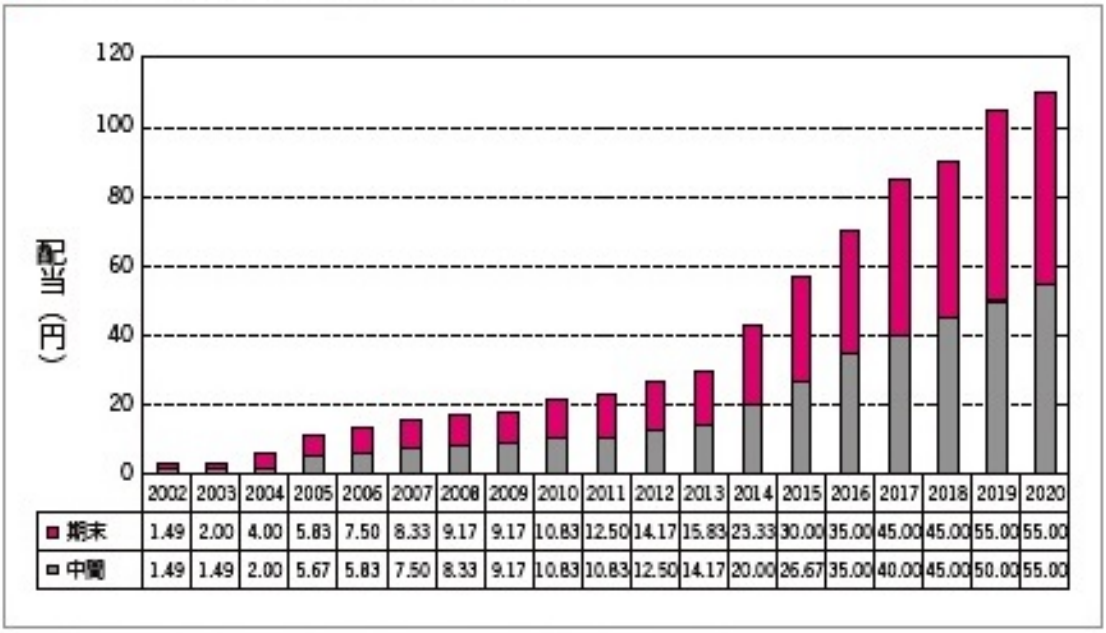
連続増配株に実際に投資したとして、資産をどのぐらい増やすことができるのでしょうか？　実際の例を元に解説しましょう。

KDDIは高配当&値上がりで10年間で約3.8倍に

連続増配中の銘柄はいろいろありますが、中でも連続増配期間が長く、配当の額もそこそこ高い銘柄の例として、**KDDI（9433）**があります。

KDDIは2003年３月期から増配が始まり、2019年３月期まで17期連続で増配しています。本書執筆時点では、2020年３月期も増配予定です。2002年３月期～2019年３月期の配当の額をみると、図0.3のようになりました。本書執筆時点の直近10年間（2010年３月期～2019年３月期）で、１株当たりの配当を合計すると、約550円になります。

●図0.3　KDDIの配当の推移（各年3月期）



	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
期末	1.49	2.00	4.00	5.83	7.50	8.33	9.17	9.17	10.83	12.50	14.17	15.83	23.33	30.00	35.00	45.00	45.00	55.00	55.00
中間	1.49	1.49	2.00	5.67	5.83	7.50	8.33	9.17	10.83	10.83	12.50	14.17	20.00	26.67	35.00	40.00	45.00	50.00	55.00

※株式分割を考慮して調整した額、2020年3月期期末は会社予想値

3-4 買い方③

好材料が出たときは材料の種類で限定的に買う

「好材料が出た銘柄を買う」という人は多いですが、高配当・連続増配株投資ではそれは必ずしも良いとは限りません。このことを考えてみます。

「株価の動きが読みやすい好材料」で買いたい

株価が上がるようなニュースのことを総称して、「**好材料**」と呼びます。「画期的な新製品を発表した」「特許が認められた」など、好材料にはさまざまなものがあります。

好材料が出ると株価が上がることが多いですが、どの程度上がるかは材料の内容によって異なります。例えば、期待感が先行する材料だと短期的に急上昇しても、その後はすぐに下落することも少なくありません。そうした場合は材料で買いを入れると、高値掴みになってしまいます。

高配当株・連続増配株は中長期投資が基本なので、高値掴みはできる限り避けたいです。そこで、好材料を知って買う場合は、**その材料で株価がどの程度上がるかを推測できる場合に限定する**ことをお勧めします。

「業績予想の上方修正」は株価上昇が予測しやすい

売上や利益が以前の予想よりも良くなりそうな場合、その企業は「**業績予想の上方修正**」を発表します。

株価は１株当たり利益に比例する傾向があります。業績予想が上方修正されて１株当たり利益が上がりそうだとなると、それに応じて株価も上がる傾向があります。

例えば、これまでの予想１株当たり利益が100円だった銘柄で、業績予想の上方修正があって、予想１株当たり利益が120円になったとします。100円から120円は20％増しですので、株価も20％前後値上がりすることが予想されます。

●業績予想の上方修正で大きく動いた例（ミサワ）

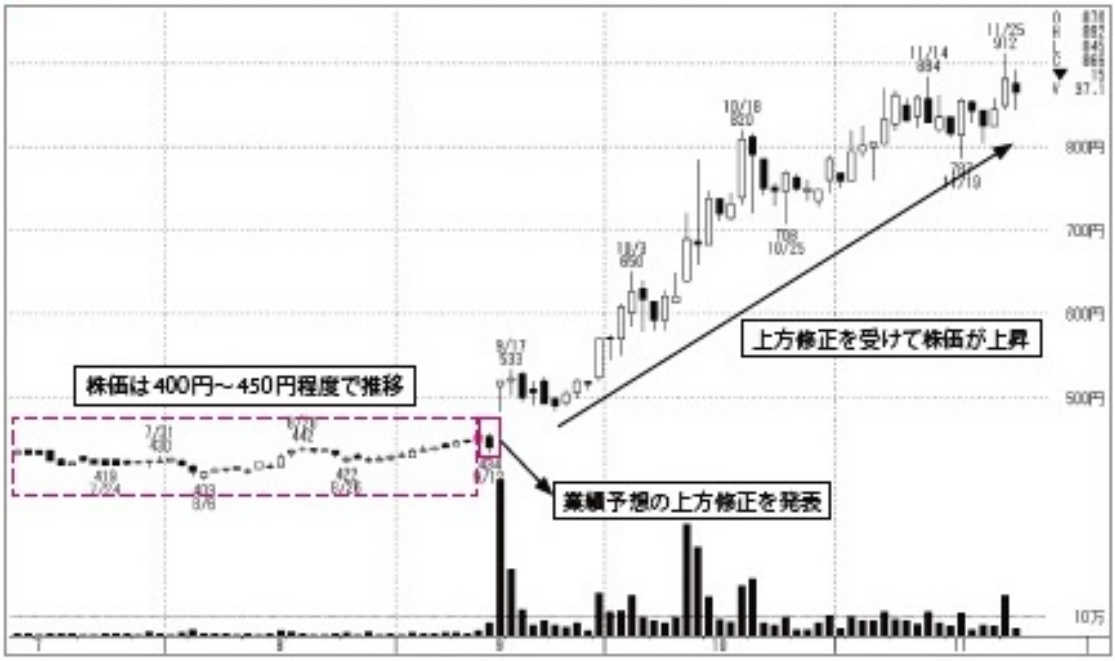
業績予想の上方修正の例として、**ミサワ（3169）**を紹介します。2019年９月12日に2020年１月期の第２四半期決算を発表した際に、業績予想を上方修正しました。１株当たり利益の予想が、当初の32.91円から49.23円に引き上げられ、およそ50％増しになりました。

それを受けて、株価も急騰しました。発表前の株価は400円～450円程度で推移していましたが、発表後は急上昇し、2019年11月25日には高値で912円をつけました。およそ２倍になっていて、１株当たり利益の伸びを超える株価上昇が起こりました（図3.5）。

このように、業績予想が上方修正されると、その度合いに応じて（場合によってはそれ以上に）株価が上がりやすく、どの程度上昇するかが読みやすいです。買い候補の銘柄で業績予想が上方修正された後で、株価がまだ上方修正に見合う水準まで上昇していなければ、買いを検討すると良いでしょう。

ただし、小幅な上方修正の場合は、株価が１日だけ大きく上がって、それ以上の上昇にはならないこともあります。その点には注意が必要です。

●図3.5　業績予想の上方修正で株価が上がった例（ミサワ）　日足/2019.7～2019.11



提供：ゴールデン・チャート社